

東京聖書学院 Tokyo Biblical Seminary 学院だより

2018年
夏号 [合併45号]
5月20日発行

発行所/〒189-8512 東京都東村山市廻田町1-30-1

[東京聖書学院] 042-391-3076 fax.042-397-7558 郵便振替00190-0-78949

[聖書学院後援会] 042-394-8791 郵便振替00170-8-136685



東京聖書学院 院長
錦織 寛

Nishikori Hiroshi

荒野で恵みを エレミヤ31章1～6節

つるぎをのがれて生き残った民は、荒野で恵みを得た。イスラエルが安息を求めた時、主は遠くから彼に現れた。

わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。それゆえ、わたしは絶えずあなたに真実をつくしてきた。(二、三節)

南王国ユダがまさに滅びようとしている、そのような時代に、エレミヤは主のしもべとして活躍しました。活躍と言いましても、実に厳しい中を彼は歩んでいました。神様から託されている言葉を二生懸命語るのです。人々はエレミヤを憎み、バカにし、あざ笑うのです。エレミヤが涙ながらに警告したにもかかわらず、人々は悔い改めようとしません。そして、エルサレムは陥落し、多くの人々が殺され、また捕囚としてバビロンに連れて行かれました。

けれども、主はエレミヤに、やがてイスラエルが復興し、また人々が喜び踊りながらエルサレムにきて、主を礼拝する日が来る、と救いと回復のメッセージをも託しておられたのです。

1・荒野で

それはまさに荒廃した地、豊かさとはかけ離れた地、孤独な地です。お金が多くあり、ものが多くあり、人が大勢いると、私たちは応応にして目に見えるものになり、人に頼るようになります。

私たちは荒野に退くべき時があります。あれもない、これもない、そして、最後は自分にも破れ果てて、誰にも自分を救うことができない、そのような荒野です。けれども神はあなたをそこで祝福しようとしておられる。エルサレムは廃墟となる。それは決して楽しいことではない。でもその廃墟の中で、そこでしか味わうことのできない神の恵みの体験があるのです。

2・ご自身を表される主

イスラエルの民は荒野で、安息を求めました。それはまさに安息がなかったからです。しかし、その時、主がご自身を表してくださいと、エレミヤは言います。聖書の中には多くの荒野が出て来ます。そして多くの人物たちが荒野で主にお会いするのです。荒野にいたこと自体は決して楽しいことではありません。けれども、主はそこであなたと出会ってください。そして主と出会ったらあなたの生涯は変わるのです。

3・愛と真実の神

イスラエルは罪を犯しました。そして、裁きの下に置かれました。罪がどんなに恐ろしいものであるかを彼らは体験しました。神は裁きの神であり、怒りの神でした。荒野で、ボロボロになつて、遠くから神が近づいてこられる：けれども、主はあなたにおっしゃる。「わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。それゆえ、わたしは絶えず真実をつくしてきた」。

神様は、こんな小さく、頑固で、聞き分けがなくて、生意気で、罪深い者を選び、愛し続けてくださっているのだ。神様が愛するとおっしゃったら、その真実の愛は決して変わらない。これは理屈ではない。神様はあの滅ぼされたイスラエルをまた回復し、聞き分けのないイスラエルの子孫のうちから本当に救い主を生ませさせ、またそのイスラエルの子らの中から弟子たちを選び、彼らを用いて、教会をスタートさせられた。神様はイスラエルを永遠の愛をもって愛されたように、あなたのことを愛していただく。

荒野に追い込まれながら、この破れた小さい自分にご自身を示し、愛を約束してくださいと主と出会ってほしい。そしてあなたは、そのあなたが出会った主を人々に伝えて行くのです。

本科入学...



2018年は14名の
新入生を迎え、



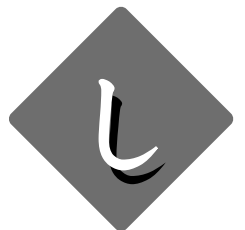
インターン生を含めて
合計32名の学生で
スタートしました。



今号では、6名の本科生、
7名の訓練生、
1名の本科三年編入生の



入学の証しを
ご紹介いたします。



赤羽根 美希
(あかばね みき)



池本 義
(いけもと ただし)



黒田 百合香
(くろだ ゆりか)



田久保 舞
(たくぼ まい)

「私は、高校二年生の時に受洗し、その頃から「将来は福音を伝える働きがしたい」と思うようになりました。大学卒業後にはつぎつぎとした献身の思いが与えられました。最初は、自分の罪深さ、弱さを思い、いくら祈っても「私のような者は主に仕えることは出来ない」という思いが強かったため、献身の道ではなく別の道を探していました。しかし、本当にこれの良いのだろうかという思いが消えず、御心を求めもう一度献身について祈り始め、その中でイザヤ四三章一―三節が心に留まりました。「私の罪をも贖ってください、どのような時も主が共にいて、私の名を呼んでくださるなら私はそれに精一杯応えたい」と強く思い、献身の道へ進むことの決心が与えられ、また、今私が出来る限りの準備と学びをしたいと思い、聖書学院へと導かれました。

これから学院生活の中で、主に信頼し祈りつつ主に喜んでいただける者へと変えられていきたいと願っています。

「私は福音を恥としません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力です。」(ローマ人への手紙二章一六節) 献身の思いが与えられたのは、今から九年前です。けれどもその思いが神様から出たものか分らず、大学卒業後は四年間一般企業で働きました。二年ほど前に主が冒頭の御言葉を読んで下さり、直接献身へと導かれました。どうしようもない罪人である私を主が救って下さり、主の働きへ召して下さった事。主のご愛によってこうして入学させて頂いた事を思い、本当に喜びでいっぱいいます。時に荒野のような日々があるかもしれませんが、この救われた喜び、主に従う喜びを持ち歩ませて頂きたいと願っています。主に用いられやうい器となるよう、主の前に謙り、三年間の学びと訓練に励みたいと思います。学院生活の中で主がこの小さな器をどのように造り変え、用いて下さるかとても楽しみにしています。

昨年度、訓練生として学ぶ中で、ローマ十二章二節から、あなたはすべてをささげきつているか、と問われました。私にとって全てをささげるといふことは、本科に進み、学びを続けることだと思われ、そして「御心でない方を閉ざしてください」ではなく「本科で学ぶ道を開いてください」と積極的に祈ることを示されたのです。そのように祈り準備をする中で、不思議なように道が開かれていき、二〇一八年度、本科一年生として入学が許されたことを感謝しています。

また、学院に入学する前には、自分が願っていることで神様の御心かどうかわからないとしか思えなかったビジョンも、二年間で徐々にですが、はっきりし始めているにも感謝しています。

訓練生として過ごした二年が、神様の最善のご計画であったことを感じています。気持ちも新たにこれからの学院生活の中で学ぶべきことをしっかりと学んでいきたいと思っています。



嶽森 幸一 (たけもり こういち)



村上 将隆 (むらかみ まさたか)



宇居 夏海 (うい なつみ)



鈴木 絵里子 (すずき えりこ)



関 勇矢 (せき ゆうや)

一年訓練コース

「そして彼らに言われた、「全世界に出て行つて、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。」 マルコによる福音書二六章二五節
主の御名を賛美します。

私は兵庫県加古川市というところに生まれ、クリスチャンホームの四人兄弟の次男として育ちました。幼いときから教会へ通い、十三歳のときに神様を信じて信仰告白し洗礼を受けました。工業高校を出て電力会社へ就職、クリスチャンとして社会を歩み始めました。しかし、この世の中でクリスチャンとして歩むことは容易ではありませんでした。仕事自体はともやがいがいがあり充実していたのですが、夜の付き合いや人間関係に悩み苦しみました。患難に合う度に主は私に必要な御言葉を与えて下さり、また、人間関係の回復、魂が碎かれ新しく生まれ変わる経験を通して私を救い出してくださいました。そして、冒頭の御言葉が与えられ私の全てを主のために捧げたいと告白し献身へと導かれました。

学院生活では全てを主にゆだね、聖霊によって日々主の御心を学び、通り良き管となれるよう歩みたいと思います。

イエスさまを心に迎え悔い改めのお祈りをしているとき、聖書(NT)の余白ページに涙が滴りました。私の罪のためにイエスさまが死なれたことが悲しかったのです。ふと目を開けると濡れたページの裏側に「Baptized」という文字が透けて見えるではありませんか。恐る恐るページをめくると、そこには「Jesus Has Died」と書かれていました。「さて、週の初めの日の朝早く、よみがえったイエスは、最初にマグダラのマリアに「自分を現された。」(マルコの福音書二六章九節)のみことばをもつて、主の復活を信じ、二〇一六年二月二十八日に当時暮らしていたロサンゼルスにて洗礼を受けました。帰国した私は横浜港南キリスト教会にて礼拝を守り、第一テモテ六章二〇節「テモテよ、委ねられたものを守りなさい。」そしてヨハネの福音書一三章二五節「わたしの子羊を飼いなさい。」のみことばをもつて献身の信仰告白に至りました。今日も主がともに働いてくださることを信じ、学びに励んでお祈ります。どうかお祈りいただけましたら幸いです。

二〇一六年、直接献身の思いが与えられた友人たちとの関わりや、同年のユースジャムスタッフでの奉仕を通して、伝道者を支える信徒としての献身への思いが起こされました。翌年の春、土師記六章二四節「わたしがあなを遣わすのではないか」という御言葉から仕事を辞め、東京聖書学院の訓練生として新たなスタートすることが示されました。さらに歩み込んだ献身を求められていると気づいた私は、最初御言葉から逃げていました。しかしここに書かれているギデオンの召命と合されるかのように、主は私が心から献身できるよう、道を開いてくださいました。主は「その力をもつて行くがよい」、「わたしが共にいる」と私を励まし続け、すぐに踏み出せず待てほしいと言う私に「あなたが帰って来るまでここにいます」と待つてくださいました。愛をもつて私の恐れに対する圧倒的な勝利を見せてくださった主に、入学まで導いてくださった主にただ感謝です。

私は二〇一四年の夏に行われた基督兄弟団の青年全国大会で献身の思いが与えられました。「わたしはだれをつかわそうか。だれがわれわれのために行くだろうか」と主がもう一度私を信頼して下さるので、「ここにわたしがおります。わたしをおつかわしてください」と出ていく決心をいたしました。しかし「私の献身のメッセージで「今は教会の先生方のサポートをしなさい」と語られ、祈りつつ時を待つことにしました。そのような中、昨年九月に行われた敬老感謝礼拝の愛餐会で川崎ホーリネス教会の小林先生が「牧師を引退しても、生涯伝道者でありたい」と言われた言葉が心に留まり、「私もそうありたい。生涯伝道者でありたい」と思いました。それと同時に私には手放せないものがあることに気付かされましたが、「賜物は捧げた分、何倍にもなつて祝福される」という信仰の先輩の言葉を思い出し、全てを主に委ね、今年の四月東京聖書学院に入学いたしました。是非、良き訓練の時間を過ごせるようお祈りいただければ幸いです。

まずは、神様の導きと恵みによって、この東京聖書学院に入学できた事を心から感謝します。そして訓練生として、私を快く迎え入れてくださった東京聖書学院の方々、そして親愛なる先輩の方々にお礼を申し上げます。そして私を祈りサポートして送り出してくださった母教会のホノルル教会のみなさま、そして全ての方々にお礼を申し上げます。

私が献身を決心したのが去年の夏、ある教会のユースキャンプがきっかけでした。一人の若者が救われ、天国での喜びを鳥肌が立つ経験と神様の成した業を目の当たりにする経験をしました。そしてイサヤの四三章が与えられ「わたしのために造ったこの民はわたしの榮譽を宣べ伝えよう」と二二節にある様に、神様の喜びのために、この人生を捧げたいと心に決めました。そしてもう一つ、私が献身をするにあたって、母の存在がその想いを揺るぎないものにしてくれました。去年の十一月頃に、母が大病を患いました。そんな中でもイエス様の平安によって輝いていた母の姿、その中から今もお現れ続けている神様の圧倒的な平安と勝利、その難難な道を通して、私の献身への想いが今二度、確かなものとなされ、揺るぎないものとなされました。主は良いお方。この神様の平安、神様の愛を一人でも多くの方が知り、受け取る事が出来て、輝けますように。

本科三年編入：



池田 恒次 (いけだ こうじ)



山本 咲 (やまもと さき)



森 宗孝 (もり むねたか)



西岡 牧葉 (にしおか まきば)



トクモト愛美ハンナ (とくもと まなみ はんな)

当学院入学までの道のりは、人間の思いを超えた神様の導きがあつてのことでした。まず、僕はアメリカの神学校を卒業の際、インターシップをロサンゼルスホーリネス教会で行いましたが、溝口先生から指導をいただき、その姿を見て牧師とは何かを学びました。その後、違う教団の日系教会ではしばらく牧会をしていましたが、行き詰まりを感じ大変悩んでいた時、相談をしていたのが主に北米ホーリネス教団の先生方でした。さらに、これからは日本でも牧会をしたいと祈り始め一時帰国した際、思いもよらず当学院を見学する機会が与えられました。ここまでの流れから御霊の導きを強く感じ、入学を決意し、三年生編入となりました。予定では三年生を終えた後、インターシップに進みますが、すでに神様の御業を強く感じ、予想以上に期待がふくらむ学院生活となつていきます。在学中、日本での牧会に向けて整えられ、イエス様のために仕えていきたいと祈り、願っています。

私は宮城県の仙台市にあります仙台聖泉キリスト教会という所から、東京聖書学院へ先日入学いたしました。私は牧師の娘として生まれ、教会が身近にあることが当たり前という環境で育ちました。また母は常に教会に仕えるという働きがいかに幸いであるのかを私に教えていましたし、私自身もその母を見て、神と、牧師、教会の方々のために仕えたいと思っていました。成長し、自らの罪深さに悩みなながらもその想いは変わらず、大学生時代に救いを受けてからはよりはよりは教会で、今後の働きを考へるようになっていきました。そして二年前教会で行われたキャンプの中で、献身の導きを確信する御言葉が与えられました。私の教会では新しい教会をもう一つ与えていただくという願いが二年ほど前から起こされ、私はその新しい教会で開拓伝道を行っていく役目を担うことになっていきます。この働きのために、この学院においてより豊かな学びと、訓練に励み主に近づかせていただきたいと思ひます。お祈りをよろしくお願い致します。

永らく勤めていた米国の会社を引退してからの学院入学、孫とも言える学友達に囲まれての聖書勉強、結婚して四〇年を迎える妻との新婚時代に戻つたような夫婦寮生活、活気溢れる隣人達の優しい心遣い、アメリカに残してきた四人の孫娘達の写真を壁に貼り付けて毎日出かける早朝礼拝、しばらくぶり味わう日本の本当に美味いトマトやイチゴの味、優しさに満ちた日本の自然が我々を迎えてくれた。主イエスと出会うのは人生の晩年でも、それまでの自分の人生を見守つて下さったのだとやつの事で気付いた。未信者だった時の経験から、キリスト教を懐疑的に見る人の心が良く判る。宗教が戦争を起こした、ひとつの宗教に固まらない方が良く、進化論を信じないなんてウソでしょう？ イエスだけが真実だと他の宗教を否定する事自体がおかしい、などと考へておられる人とお逢いする時、ああ、自分もそうだったんだよなあと、思うと同時に、そんな皆を愛し、その罪を一身に追つていつの日か、彼らが主を賛美するのを手伝て欲しいと自分に語りかけるイエスがいます。この一年間全ての時間を御言葉の為に注ぎ、祈り、聖霊の助けを受けて、来年は奉仕先と夫婦で願つている熊本天草半島に向かう事でしょう。それまで毎朝、喜び満ちて朝起きること、今日の授業は聖書から何を学べるのか！ 楽しい学院生活、引退生活 万歳

私は日本ホーリネス教団の牧師家庭で生まれ育ちました。Ezra という高校生伝道機関での信仰成長と、直接献身している人々の生き生きとした姿を見て、人生を通して神様のために生きたいと思うようになりました。マタイ十一章二八―三〇節を通して神様に、「あなたにピッタリな仕事を与えらるから、心配しないでただ私についてきなさい。」と言われ、東京基督教大学に進学しました。大学四年になり社会経験のため、そして直接献身から逃げるため一般就職を選びました。しかし、宣教船である〇〇のロゴス・ホープ号へのあこがれが強くなり、これなら良いスタートになると思い始めました。卒業を目前にした二〇一六年二月にデポジションで将来について悩み折つているときに、使徒行伝二六章二七―一八節「…あなたを救い出し、あなたを遣わす。」が与えられ、働いてお金をためて、宣教師として船に乗る決心が与えられました。同時に、船の後は日本における宣教に関わりたいと思われ、東京聖書学院で聖書を学ぶことを決心して船に乗り、主はそのまま学院へと導いてくださいました。

クリスチャンホームに生まれ、幼い頃から信仰を与えられていましたが、中高で部活を優先し神様から離れていました。その罪が示され受洗をし、そして父の母校であるハワイ大学へと入学するように導かれました。自分の願ひではなく、主に導かれた結果での入学だったので、「私はなぜここにいるの？ 帰りたい！」という日々が続き苦しみました。しかしクリスチャンのルーミットという思いが与えられ、大学でのミニストリーや新しい教会での出会いを通してイエスさまと個人的な関係を築き始めたことによつて、「主のために働きたい！」という思いが与えられました。それでも日々の生活の中で出合いの罪深さを示され、このような私が主に仕えていけるのかと葛藤しました。エペソ三章七―九節を与えられ献身の思いが確信へと変えられました。まず母国語で学ぶことを勧められた結果、学院へと導かれました。主ご自身を更に深く学べる恵みに日々感謝しつつ、仕えていくために整えられていきます。

新舎監の挨拶

平野 信二

今年4月から男子寮舎監の任命を受けました。学院卒業から31年を経て「再入学」となり、緊張しながらも充実した日々を送っています。大先輩の伊藤昭吉牧師からスペースシャトル・コロンビア号の事故を例に「何ごとも出発が大切」との有り難くも、重みのあるお言葉をいただきました。それは入学式後のレセプション席上で新入生に向けて語られたものでしたが、舎監として、献身者たちの大切な「出発」を託された私自身への^{はなむけ}餞であり、訓戒として受け止めさせていただきました。厳しさの中にも、献身者を送り出す教会の思いと、学院のために祈り献げてくださっている支援者として思いをいっぱいを感じる一言でした。

今まで神学とは一線を画して(?) 歩んできましたので難しいことは教授たちにお任せしたいと思っていますが、30年余の牧会生活を通して「いかに牧師として生きるか」ということは考えてきたつもりです。また、数年間、学院理事として学院をチェックする側にいた者が、チェックされる側に移ったことに恐れを感じています。しかし、祈りの中で示された「自分の力でできることをしなさい。神があなたとともにおられるのですから」(サムエル記第一十章7節/新改訳2017)とお言葉に従って、与えられた使命を担っていきたく願っています。なにぶん高齢者の域に近づきつつありますので、(今のところ健康診断の結果は正常値の範囲ですが)健康のためお祈りください。



神の賜物と召しとは
変えられることがない

久保木 聡子

この春から聖書学院の女子舎監として新しい歩みを始めさせて頂いております。皆様のお祈りを感謝致します。「舎監」のお話を頂いた時は思わず「この私がですか?」と聞き返したほどですが、ここに主の御心があるなら「従います」と心が定まりました。

学院卒業後、12年間苦楽を共にした教区、教会の皆様と離れ難い思いはありましたが、その時思い起こされたのが冒頭のみ言葉です。15年前、学院に入学した頃、障がいを持つ長男が新しい環境に慣れず、每晚「お家へ帰ろうよ」といって泣いて「このままいくとてんかんになるかもしれません」と養護学校(特別支援)の先生からも言われ、どうすることもできず、いよいよ進退せまられる状況の中で上から与えられたお言葉でした。その時「こんな者を救し、救ってくださったイエスさまのご愛と、主が私を召して(コーリング)おられることは、決して変わらないんだ」ということを心に打ちこまれ、私はこのみ言葉を握って、そこから一度も迷うことなく今に至っていることを思われ、「どこにあっても私は主のもです。この身一つでよければお献げします」と再献身の思いで学院にきました。

学院を支える先生方、スタッフの皆様、後援会の皆様のご労と祈りを肌で感じつつ、これから伝道の場合へ遣わされていく愛する修養生と共にしっかりとこの恵み(召し)に立って歩んで行けたらと願っております。



事務局ニュース

- 3月31日をもって、24年間キッチンリーダーとしてお勤めくださった、加野島幸子姉が退職されました。それに先立ち、3月8日午後1時半より送別感謝会が行われ、卒業生を含め約140名で、姉妹の長年の献身的な働きに対して感謝する時を持ちました。
- 12年間舎監としてご奉仕くださった、佐藤義則師・具子師ご夫妻は、3月31日をもって退任し、4月1日より、男子舎監に平野信二師が、女子舎監に久保木聡子師がそれぞれ就任いたしました。
- 4月より、安井聖師が准教授に就任いたしました。
- 6月29日に予定されていたTBSチャペルコンサートは、都合により中止になりました。
- 学院では、食堂で修養生たちがいただくお米の献品を受け付けております。ご協力をよろしくお願いいたします。

卒業生・OBのページ 思い出と期待と

祈りを繋いで

日本ホーリネス教団新井教会
牧師 水間 町子



学院を卒業して今年で四六年になります。卒業した頃は、様々な戦いを越え、忍耐と研鑽を積んで卒業したという思いが強く、正直言つて、母教会を始め多くの方々の祈りとサポート、先生方の忍耐と熱いご指導があった事に、誠に感謝が薄い者でした。しかし献身者を送り出すようになり、毎朝毎晩の禱援が常となり、自分もこのように祈られて卒業させて頂いたのだと気持ち、改めて感謝しています。

学院では多くを学びましたが、今も続いていることが二つあります。一つは早天祈祷会です。卒業以来、結婚してからも一度も休まず続けています。もう一つは食事当番です。女子が作り配膳し、男子が片づけ皿洗いをする習慣は、今も変わらず続いています。

日本ホーリネス教団上野教会・戸田教会
牧師 松本 順

私が東京聖書学院に入学したのは一九九二年ですから、早いものでもう四半世紀が経過したことになります。しかし、私にとって東京聖書学院は今もとても身近な存在であり続けています。一つには、東京聖書学院後援会評議員として、毎年一度の評議会において東京聖書学院の働き、後援会の働きについて詳しくお話を聞いているからです。

後援会の皆様は本当に一生懸命修養生のために祈り仕えて下さっています。また多くの方の祈りと献げ物によって修養生が支えられ、良い訓練がなされています。思えば私もそうでした。後援会をはじめ多くの方の祈りと励ましによって支えられて、学院での学びを修め、牧師となることが出来たと今更ながら感謝しています。

また、もう一つに、ネヘミヤプロジェクトの一員として関わらせていただいたことがあります。このプロジェクトにより、東京聖書学院の寮をはじめとする施設のリニューアル工事が行われました。このために後援会からも多額の支援がなされています。私が過ごしていた時から変わらない施設でしたから、それは老朽化が進んでいました。しかし今や、とても明るく清潔で過ごしやすい寮、快適に学びにいそむことが出来る施設となりました。さらに開かれた多くの献身者が集う東京聖書学院となる事でしょう。私が東京聖書学院で学んだこと、それはもう昔のことで忘れてしまいました。祈りや聖書にしても、祈りや聖書にしても、何にしても、「神様の御前に誠実であること」。それを当時男子寮舎監であった石原潔先生から学びました。歳を重ね時代も変わりましたが、これが私にとって学び得た変わることはない恵みです。

おもいで……



園芸ボランティア…

あれこれ(舞台裏は)

「もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はみ手のわざをしめす」…詩篇19:1

この作業は年間7回、3・4・5・6・7・8・10月の第二か第三水曜日に行われています。その都度1ヵ月前には近隣の30教会にボランティア参加への呼びかけ状を送付しています。

このところの平均的参加者数は、7～10教会から20名前後です。男女比率は4:6でしょうか、ここでも高齢化の波は避けられませんし、今後の課題でもあります。

【私の場合】

実施当日の天候を気にしながら、祈りつつ備える。2・3日前に必要な物資、休憩時のお茶、ドリンク、お菓子、軍手、ごみ袋などを購入します。当日は5時半に起きて、そそくさと食事を済ませて、参加者をピックアップして廻ります。道路混雑でヤキモキすることもあります。8時50分TBS到着を目指します。

9時より挨拶・点呼、作業内容の説明、人員の配置、そして作業の安全を願い祈禱していただきます。食事発注数などは当日の点呼により確認します。

9時半頃より作業開始、10時半にはティータイム、このティータイムに学院教会のI姉より、毎回のように団子やゼリーなどの差し入れがあります。また夫々の作業、12時10分ランチタイム。この昼食時がまた楽しみです。厨房スタッフの心のこもった調理・同じ釜の飯を修養生達と戴いた(食卓テーブルは別々ですが)あと、各人の紹介や時には修養生・インターン生のお証も伺います。

【交わり・情報交換の場】

このように、ティータイムや、ランチタイムには参加者同士の交流や、所属教会の情報交換の場としても有益です。「わたしたちの信仰の導き手であり、完成者であるイエスキリスト」を頭とする、ホーリネス群に属し、TBS/JHC本部という場所で奉仕ができる連帯意識と主にある喜びがあるとします。午後3時終了予定ですが、片付けなどで3時半ごろになります。主婦の方もおり、遠方からの方もおられますので、そう遅くまではできません。また、行き帰りの車の中も懇話サルーンとなり、有意義なひと時でもあります。

【変わらざるごととして】

福音宣教・伝道活動の最先端に立つであろう献身者、修養生、訓練生のために力強く献金と祈りと、環境美化奉仕をもって聖書学院を団結して支えてゆくようではありませんか。私たちに出来ること、学院敷地内園芸ボランティアを、芝刈り、花壇除草整備、枝きりなどもその一つです。遠距離の人は気持ちがあってもなかなか参加出来ないでしょう。聖書学院が東村山の地にある限り環境美化のため我が家のこととして覚えて下さい。

後援会会長 遠藤 正治



支えます、献げます、
祈ります。

東京聖書学院後援会 振替・00170-8-136685
E-mail:kouenkai8512@yahoo.co.jp

〒189-8512 東村山市廻田町1-30-1